町誌編さん室の

島のむんがたり

～「サルマタ（猿股）」のはじまり～

「ふんどし」のことを徳之島の方言で「サナギ」と言います。

大正の頃まで、13歳になると「十三サナギ」と言って、男女ともふんどしを締めて正月にお祝いする風習がありました。男の子も女の子もそれまでは下に何もつけていませんでしたが、このときに初めてふんどしを締めたそうです。

さて、そんな徳之島に「サルマタ（猿股）」というパンツが普及します。そのきっかけになったのが明治35年に花徳で行われた野球大会でした。当時大島郡内で野球をやっていた学校は、紀光公青年（延岡中学在学中）が指導する亀津高等小学校と紀喜俊先生率いる花徳高等小学校の二校だけでした。早稲田大学に野球部ができたのが明治34年ですから、徳之島の野球の始まりは驚くほど早かったんですね。

ところでこの試合で困ったのが、下着でした。野球はボールを投げたり走ったりするので、着物がはだけてしまっては、野球どころではありません。そこで紀光公青年は自分が着用していたサルマタを参考にして、さらし木綿からサルマタを作る方法を考え、両チームのお母さんたちに作ってもらうことにしました。そのときの両チームのユニフォームは、下はサルマタで上着は前ボタン式の袖の短いシャツという出で立ちでした。それでも子どもたちは実に得意満面に出場したということです。

サルマタは、こうして華々しく徳之島でお披露目しましたが、一般に普及したのは、ずっと後の昭和初期になってからのことでした。そのときは男性女性に関わらずサルマタが流行ったそうです。（町誌編さん室　米田博久）

【亀津商店街と猿股の少年（S30年頃）】

問 郷土資料館 ☎0997-82-2908